

## エミール・ベルナール

Émile Bernard

(1868 リール - 1941 パリ)

16歳の時にパリに出て歴史画家コルモンに師事するが、アカデミックな教えに反発し、2年でアトリエを去る。単純化した形態を暗色の輪郭線で縁取るクロワゾニズムを追求し、1888年にはポン=タヴェンにて、ゴーガンとともに総合主義を確立した。平坦かつ装飾的な画風でブルターニュを題材とした作品を多く描いたが、1900年代以降は主題や様式が変化し、モニュメンタルな人物像を含む古典主義的な作品を描いた。

## ピエール・ボナール

Pierre Bonnard

(1867 フォントネー=オー=ローズ - 1947 ル・カネ)

パリで法律を学んでいたが、国立美術学校とアカデミー・ジュリアンで絵画を学び、セリュジエやドニらとともにナビ派を結成する。印象派の柔らかな色彩を取り入れながらも、日本の浮世絵に触発された大胆な構図を特徴とし、「日本風のナビ」と呼ばれた。家族のいる室内の情景や日常を切り取った作品を描く親密派<sup>アンティミスト</sup>としても知られる。家具や装飾画も積極的に制作し、特にリトグラフによるポスターや挿絵は高い評価を受けた。

## ウジェーヌ・ブーダン

Eugène Boudin

(1824 オンフルール - 1898 ドーヴィル)

船長であった父の船で働き、海や港町の空気に親しんだ。1847年頃に本格的に画家を志すようになり、パリに向かうと、ルーヴル美術館に陳列されていた作品や自然から直接学んだ。作品の大多数は風景画で、北フランスの沿岸や港を描いている。いきいきとしたタッチで光と大気の効果を捉えた印象派を予告するような作品で知られ、またモネを戸外制作へと導き、印象派の発展に貢献した。

## ポール・セザンヌ

Paul Cézanne

(1839 エクス=アン=プロヴァンス - 1906 エクス=アン=プロヴァンス)

エクス=アン=プロヴァンスで生まれ育つ。法科大学を中退し画家を志すものの、国立美術学校の入学試験に失敗し、サロンでも落選が続いた。初期の頃は暗い色調の作品を描いていたが、ピサロと知り合い、印象派の描法を吸収する。1880年代に故郷に戻ると、独自の様式を確立していく。対象の量感を際立たせる堅固な造形と彩色、そして秩序ある空間の構築を探求し、キュビズムをはじめとした後世の画家たちに影響を与えた。

## ジャン=バティスト・カミーユ・コロー

Jean-Baptiste-Camille Corot

(1796 パリ - 1875 パリ)

商家に生まれる。家業を継ぐことを期待されていたが、26歳の時に画家を志すことを許され、歴史風景画家のミシャロンとベルタンに学ぶ。戸外での写生を積極的に行い、三度のイタリア滞在のほか、ヴィル=ダヴレーやフォンテーヌブローの森をはじめとする母国の自然から直接学んだ。初期は様々な様式を試み、サロンには古典的な歴史風景画を出品していたが、1850年頃から銀灰色を帯びた柔らかな大気と光に満ちた抒情的な作風に変化した。

## ギュスターヴ・クールベ

Gustave Courbet

(1819 オルナン - 1877 ラ・トゥール=ド=ペ)

フランス東部の町オルナンに生まれ、ブザンソンの美術学校で学ぶ。1839年にパリに出ると、アカデミー・シュイスに通いルーヴル美術館で模写に励んだ。写実的な様式で故郷の労働者や農民を歴史画のような大画面で描き、物議を醸す。出品を拒否された1855年のパリ万国博覧会時には、レアリズムを宣言し自ら個展を開催した。1860年代になると、狩猟画や風景画がサロンで評価される。力強く独特なレアリズムによって、近代絵画における先駆的な存在となった。

## シャルル=フランソワ・ドービニー

Charles-François Daubigny

(1817 パリ - 1878 パリ)

風景画家であった父から絵画の手ほどきを受け、ドラロッシュのもとでも学んだ。1838年に初のサロン入選を果たし、1840年代にはフォンテーヌブローでバルビゾン派の画家たちと親交を結んだ。コローとは戸外での制作をともにし、自然観察の重要性を学ぶ。アトリエとして使用するための小型船を購入し、セーヌ川やオワーズ川を移動しながら多くの作品を制作。1860年代には、サロンの審査員として印象派の画家たちを擁護した。

## カール・ピエール・ドービニー

Karl Pierre Daubigny

(1846 パリ -

1886 オーヴェール=シュル=オワーズ)

画家シャルル=フランソワ・ドービニーの息子で、父の手ほどきを受けて育つ。1863年にサロンに入選を果たすと、晩年まで出品を続ける。初期は父の影響が顕著であったが、まもなくして暗い色調による憂愁を帯びた独自の様式を発展させる。ブルターニュやノルマンディーの沿岸、フォンテーヌブローの森の風景が主な画題となった。父の方がよく知られているが、カールも19世紀後半のフランスにおける代表的な風景画家に数えられる。

## エドガー・ドガ

Edgar Degas

(1834 パリ - 1917 パリ)

パリの銀行家の家庭に生まれる。古典主義の画家アングルの弟子であるラモートに師事し、初期の頃には歴史画や肖像画を描いた。1856年から1859年にかけてはイタリアを旅し、ルネサンスの巨匠たちの作品を学ぶ。1870年代になると近代的な主題が増え、筆触分割は用いなかったものの、印象派展の熱心な参加者となる。劇場や競馬場など、同時代の都市に見られた情景を題材に、特に対象の動きを捉えることへの強い関心とともに、踊り子や馬を描いた。

## ポール・ゴーガン

Paul Gauguin

(1848 パリ - 1903 マルケサス諸島)

株式仲介人として働く傍ら絵を描いていたが、35歳の頃に画家になる決意をする。ピサロとの交流を通じて印象派を学んだものの、次第に新たな表現へと向かう。1886年から滞在したポン=タヴェンでは、ベルナールと総合主義を確立。単純化された形態と平坦な色面を特徴とする作品で、象徴的、精神的な表現を目指した。近代文明から逃れることを望み、1891年にタヒチへと渡るとプリミティヴな作品を制作した。晩年はマルケサス諸島に移り住む。

## フィンセント・ファン・ゴッホ

Vincent van Gogh

(1853 フロート・ズンデルト -  
1890 オーヴェール=シュル=オワーズ)

27歳の時に画家になる決意をし、オランダやベルギーで修業を積む。ブソ・エ・ヴァラドン画廊のモンマルトル店を任されていた弟のテオを頼り1886年にパリに出ると、印象派や新印象派の筆触と明るい色彩を吸収する。1888年からはアルルでゴーガンと共同生活を送る。短期間であったが、ここで鮮やかな色彩と力強い筆触による独自の様式を発展させた。晩年はサン=レミの療養所で絵筆をとったのち、オーヴェール=シュル=オワーズに移り、その地で自害した。

## アルマン・ギョマン

Armand Guillaumin

(1841 パリ - 1927 パリ)

16歳の時に画家を志す。アカデミー・シュイスで出会ったセザンヌやピサロと親交を結び、働きながら1863年の落選者展に出品、印象派展にも6回参加した。初期は暗い色調の作品を描いていたが、1870年代になると印象派の明るい光や構築的な筆致が見られるようになる。1891年に宝くじに当選し、仕事を辞めて絵画制作に専念する。クルーズ川流域や地中海沿岸、旅先の風景に触発され、単純化された形態と鮮やかな色彩を特徴とする作品を生み出した。

## チャイルド・ハッサム

Childe Hassam

(1859 ドーチェスター、マサチューセッツ -  
1935 イースト・ハンプトン、ニューヨーク)

アメリカにおける印象主義を牽引した画家で、明るい光と色彩で都市の喧騒や田舎の情緒を捉えた作品で知られる。挿絵の仕事をしていたが、1880年代半ばには都市の路地を描く画家としてボストンで評価を得た。1886年から1889年までパリに滞在し、当初はアカデミー・ジュリアンで学んだが、アメリカの収集家の間で人気が高まっていた印象派を吸収する。印象派の柔らかな色彩と筆触を取り入れながらも、人物には堅固な造形を維持した独自の作風を展開した。

## ヨハン・バルトルト・ヨンキント

Johan Barthold Jongkind

(1819 ラトロップ -  
1891 ラ・コート=サン=タンダレ)

ハーグの美術アカデミーで学んだのち、1846年にパリに向かう。空や建築物が広く画面を占める伝統的なオランダの風景画の構図に、当時のフランス絵画を思わせる柔らかな光や大気の表現を取り入れた独自の作風を展開する。1848年にサロンに最初の入選を果たす。1850年代半ばにオランダに一度帰国するが、パリに戻ると1863年には落選者展に参加した。後年はスイスや南フランスを旅し、大胆な構図に明暗の効果をかきた抒情的な作品を描いた。

## クロード・モネ

Claude Monet

(1840 パリ - 1926 ジヴェルニー)

ノルマンディーの港町ル・アーヴルで育ち、ブーダンから自然観察と戸外制作の重要性を学ぶ。1859年にパリに出て、アカデミー・シュイスでピサロと、グレールのアトリエでルノワールやシスレーらと知り合った。筆触分割による新たな様式を確立し、第1回印象派展に《印象、日の出》を出品する。この作品に対する批評がもととなり、印象派の名称が生まれた。1880年代の末以降、移ろう自然の様相を捉える試みは、同じモチーフを異なる時間や天候のもとで表す「連作」へと結実した。

## カミーユ・ピサロ

Camille Pissarro

(1830 セント・トーマス島 - 1903 パリ)

カリブ海のセント・トーマス島に生まれ、画家を志して1855年にパリに出る。コロートと制作を共にして学び、アカデミー・シュイスでモネやセザンヌらと出会った。印象派の画家の中では最年長であり、8回開催された印象派展の全てに参加。ゴーガンなどの若い画家を展覧会に招く中心的な存在であった。パステルや版画など多様な技法で制作し、主に田舎の風景や生活を題材に描いた。1880年代に一時的にスーラの影響を受け、点描主義の作品を残している。

## ピエール=オーギュスト・ルノワール

Pierre-Auguste Renoir

(1841 リモージュ -

1919 カーニュ=シュル=メール)

職人の両親のもとに生まれ、陶磁器の絵付け職人として働く。1862年に国立美術学校に入学し、グレールのアトリエではモネやシスレーらと知り合った。行楽を描いた明るい情景や柔らかな人物が次第に評判を呼び、特に肖像画は好評を博す。イタリアへの旅を契機として、1880年代には堅固な輪郭線に基づく古典的な様式を模索したが、1890年前後には豊かな色彩と筆致が戻った。晩年は南フランスのカーニュ=シュル=メールで豊満な女性像を中心とした作品を制作した。

## ポール・セリュジエ

Paul Sérusier

(1864 パリ - 1927 モルレ)

1888年の夏にポン=タヴェンに滞在し、総合主義を確立したばかりのゴーガンの教えを受けながら《ポン=タヴェンの愛の森(タリスマン)》を制作する。作品を見たアカデミー・ジュリアンの仲間たちは、単純化された形態や鮮やかな色面、ゴーガンの思想に感銘を受け、ナビ派の結成へと至った。ブルターニュの風景や人々を描いたほか、ケルトの文化が色濃く残る同地の伝説なども描いている。アカデミー・ランソンで教鞭をとり、1921年には理論書『絵画のABC』を出版した。

## ポール・シニャック

Paul Signac

(1863 パリ - 1935 パリ)

初期は印象派の技法で風景画や静物画を描いたが、1884年にアンデパンダン展の創設メンバーとなりスーラと知り合うと、科学的な理論に魅了され、新印象主義に追随した。印象派展や20人展に参加し、定期的に作品を発表する。1892年、パリからサン=トロペに移り住む。スーラが点描主義の創始者であるならば、シニャックはその理論を広く伝える役割を担った。理論家として新印象派を擁護し、歴史的なコンテクストにおいて評価しようと試みた。

## アルフレッド・シスレー

Alfred Sisley

(1839 パリ - 1899 モレ=シュル=ロワン)

イギリス人の実業家の子として生まれ、家業を継ぐために滞在したロンドンで、おそらくターナーやコンスタブルの作品を見て画家を志す。パリへ戻ると1862年にグレールのアトリエに入り、モネやルノワールらと知り合う。フォンテーヌブローの森をはじめとするパリ近郊で戸外制作を行い、自然から直接学んだ。画業を通して印象派の典型的な描法を保ち続け、大気の震えや水の表情を繊細に捉えながらセーヌ川やロワン河畔の風景を多く描いた。

## レッサー・ユリイ

Lesser Ury

(1861 ビルンバウム - 1931 ベルリン)

11歳の時に父を亡くし、一家でベルリンに移り住んだ。1879年よりデュッセルドルフのアカデミーで学び、1887年にベルリンへ帰るまでに、ブリュッセル、パリ、シュトゥットガルトといった各都市で学ぶ。1893年にミュンヘンの分離派に参加し、1915年以降はベルリン分離派展に出品する。60歳を記念して開かれた大規模な展示で名声は揺るぎないものとなった。静物や風景を印象派に近い技法で描き、雨の路地や夜のカフェを描いた作品は特によく知られている。

## テオ・ファン・レイセルベルヘ

Théo van Rysselberghe

(1862 ヘント - 1926 サン=クレール)

ブリュッセルの王立美術アカデミーで学ぶ。ベルギーが前衛芸術の中心地として活気づいた19世紀後半の首都にあって、若くして「20人会」の創立メンバーとなった。初期は印象派やホイッスラーに影響を受けていたが、1886年にスーラの作品を見て感銘を受け、新印象主義を吸収した。以降、ベルギーにおける点描主義を牽引する存在となる。1910年にル・ラヴァンドゥーのサン=クレールに落ち着くと、晩年までこの地の風景に触発されながら制作した。

## エドゥアール・ヴイヤール

Édouard Vuillard

(1868 キュイゾー - 1940 ラ・ポール)

1877年に家族でパリに移り住む。国立美術学校に入学するが、アカデミー・ジュリアンでも学ぶ。ここで親交を結んだボナールやセリュジエらとともに1889年にナビ派を結成し、ゴーガンに触発された非写実的で装飾的な表現を探究した。壁紙や窓など、装飾的な形態を持つモチーフに彩られた室内とそこで過ごす友人や家族を描いた作品で最もよく知られ、アンティミスト親密派の代表的な画家に数えられる。舞台美術や大規模な壁画装飾も手掛けた。